

日本語学習のさらなる動機づけにつながる 短期留学プログラムを目指して

－「泰日工業大学日本語サマーキャンプ」の歩みと課題－

田中 真寿美 佐藤 香織

1. はじめに

日本学生支援機構(以下 JASSO)の調査(2009～2014年度)によると、日本へのいわゆる留学ビザを要さない、6か月未満の短期教育プログラムへの参加者(大学学部レベル)は年々増加し、2009年度に3,925人だったものが2014年度には11,428人とおよそ3倍となっている。期間別に見ると、「2週間未満」及び「2週間以上1か月未満」のプログラムへの参加者数がいずれの年もそれぞれ3割以上、両者合わせて7～8割に達し、「1か月以上3か月未満」「3か月以上6か月未満」のプログラム参加者より多かった。学部・短期大学・高等専門学校に留学ビザを持って在籍する留学生数が2011年以降伸び悩んでいることを考えれば、短期留学へのニーズの高さは注目に値する。

現在、大学の学期間休暇を利用して参加できる短期の教育プログラムは多くの国で行われているが、韓他(2015)は、短期の教育プログラムの主目的は大学の国際交流の促進であり、その効果として、留学生を受け入れることで在籍学生の国際交流活動の活発化が図れること、短期留学を経験させることで中・長期の留学志望者が増加すること、質の高い学生を呼び込めることなどを挙げている。2008年に政府が打ち出した「留学生30万人計画」でも、留学生受け入

れ数を増やす方策の一つとして大学等の教育研究の国際競争力の向上が挙げられ、短期留学の推進がその具体策の一つとなっている。

本学では、2010年に短期日本留学プログラム「泰日工業大学日本語サマーキャンプ」(以下サマーキャンプ)が始まったが、継続的に実施されている受入れプログラムは現在、これのみである。本稿では、これまで運営してきたサマーキャンプを概観し、他プログラムとの比較を通してサマーキャンプの特徴を明らかにする。また、サマーキャンプ内の日本語授業の改善がいかなされてきたかを述べる。これらを、サマーキャンプの内容の充実と今後の他プログラムへの応用・開発への材料としたい。

2. サマーキャンプの概要

2.1 目的

サマーキャンプは、2011年に本学との交流協定が結ばれた泰日工業大学の学生を対象に、4月、5月のおよそ1か月にわたり行われる短期留学¹プログラムである。互恵的な関係構築のため交流協定に先立つ2010年に始まり、現在までに6回実施されている(東日本大震災のあった2011年は実施せず)。

¹ 短期留学の種類については第3章参照

泰日工業大学は、グローバル化を増すタイ産業界、「とりわけ日系企業のニーズに対応して日本的ものづくり思想のもと」、「日本のものづくりに直結する、実務かつ実践的な技術と知識を兼ね備えた学生を育成」（泰日工業大学ウェブより）することを課程の特徴としており、英語に加え、経営・工・情報の全ての学部で日本語の履修が求められている。

日本語学習が盛んな泰日工業大学の学生対象であることから、サマーキャンプは日本語教育をプログラムの中心に据え、その目的を日本・

青森への理解を深めるための諸活動を提供し、帰国後のさらなる日本語学習・日本理解につなげること、また、長期留学へのきっかけとなるように本学の認知度を高めることとした。

2.2 対象

例年、泰日工業大学から20人ほどの学生が1人のタイ人教師に引率されて参加している²。これまでに、経営・工・情報の3学部から、学年、専攻、日本語レベルが様々な延べ115人の学生を受け入れた（表1参照）。

表1 泰日工業大学日本語サマーキャンプの実施年・学生数・期間

実施年	学生数	期間	実施年	学生数	期間
2010年	34人	5/2～5/30	2014年	20人	4/30～5/25
2012年	13人	4/30～5/25	2015年	20人	4/29～5/24
2013年	20人	4/30～5/24	2016年	7人	5/2～5/24

2.3 内容

サマーキャンプの特徴は、日本語学習に加え、日本文化体験、農家民泊と施設訪問などを含む社会・交流体験がプログラムに組み入れられていることである。例年、日本語の授業は平日の午前中を中心に40～50コマ（1コマ45分）あり、日本文化・社会体験は日本語授業がない午後や週末・祝日に行われ、農家民泊は2泊3日で行っている。サマーキャンプの修了者には泰日工業大学が単位を付与するため、日本語授業において複数回の（小）テストを実施する他、サマーキャンプの最後には日本語での口頭発表あるいはポスター発表を課し、形成的・総括的評価を行っている。交流は、学外の日本人の他、留学生チューターをはじめタイ留学希望者など、本学の日本人学生とも行われ、本学の学生にとっても国際交流・国際理解のためのよい機会となっている。サマーキャンプの内容例として2016年度のものを表2に示す。

上記の特徴は初年度から変わらないが、日程の密度は6年間で変更していった点である。初年度は日本語授業がゴールデンウィーク中や土曜日にも行われたが、祝日・週末の授業は教師確保が難しいことから2012年度以降は授業を平日のみにし、土曜・祝日は学外での社会体験、文化体験を行うことにした。また、初年度は週末に社会体験が多く設定されていたが、2012年度以降は農家民泊などの予定が入らない限りはフリーとし、2014年度以降は来日後間もないうちに市営バスの乗り方を教え、自由に使える時間を増やし、行動範囲を広げさせている。さらに、2010・2012年度は農家民泊終了の翌日の午前中も日本語授業が設定されていたが、授業中

2 泰日工業大学には本学以外にも短期留学プログラムがある。2016年度の引率教師によると、2016年度に新たに始まった東京都内でのプログラムへの参加者が増えたことで、2016年度のサマーキャンプへの参加者が減少した。

の学生に疲れが見えたことから、2013年度からは農家民泊終了翌日の日本語授業は、午後に行うことにしている。このように、日程は初年度以降、余裕のあるものになってきており、出か

ける社会体験先の取捨選択も進んだ。参加学生の身体的・心理的負担の軽減が図られてきたと言えよう。

表2 2016年度泰日工業大学サマーキャンプ内容

	活動	内容
日本語授業	①日本語授業 40 コマ ②成果発表会・リハーサル 6 コマ	①トピック・場面シラバスに基づく表現練習、日本についてのミニ講義、グループインタビュー、日本語の歌、日本語でのお礼状、民泊で気になったことの振り返り ②サマーキャンプの総括としてのグループ発表
体文日 験化本	藍染、勾玉作り、書道、茶道、着物着付け	解説とそれに従った体験 書道体験は本学日本人学生が講師
日本社会体験	①農家民泊 ②老人ホーム三思園、第一幼稚園、浪岡りんごセンター見学 ③県内見学・散策	①黒石市の農家での農作業体験とホームステイ ②三思園での日本語の歌の披露 ③浅虫水族館・昭和大仏・三内丸山・AOMORI 春フェスティバル見学と日本人へのインタビュー、弘前公園、奥入瀬溪流・十和田湖、黒石こみせ通り散策
交流体験	①FSA 新入生歓迎会参加 ②青森南高校との交流 ③ウェルカムデスク参加	①タイ舞踊披露、タイの子供の遊び紹介 ②日本語・英語での文化紹介と自由会話 ③日本人チューターとの自己紹介

2.4 企画・運営・実施

泰日側との連絡・交渉、プログラムの全体の企画は、本学の国際交流課スタッフ（主担当1人）が担っている。プログラムの運営は本学国際交流課が中心となる。泰日工業大学の学生及び引率教師は、本学内の学生寮あるいは近隣のホテルに宿泊するが、学生寮に宿泊する場合は部屋の管理を、ホテルに宿泊する場合は本学・ホテル間の送迎を、国際交流課が中心となっていて行っている。日本語授業については、シラバス作成は田中らが行い、授業運営も1～2名の非常勤の日本語講師とともに行っている。

農家民泊は、本学も構成員となりグリーン・ツーリズム体験のための外国人観光客誘致を

行っている「アジアからの観光客誘致推進協議会」（以下協議会）がコーディネートしている。社会体験のうち本学外での活動の一部は、本学国際交流課と、同じく協議会の一員である「あおもりくらしの総合研究所」が連携してコーディネートしている。

国際交流課スタッフ及び田中ら教員は、いずれも他の教育研究活動・業務と兼任である。前節で、ゴールデンウィーク中の土曜・祝日は日本語授業をなくし、学外での社会体験、文化体験を行っていると言ったが、これら体験活動への引率も国際交流課のサマーキャンプ担当課員が主に行っている。通常の授業や新入留学生受け入れで多忙な前学期開始直後という時期にサ

マーキャンプを受け入れ、運営・実施を行うには、人員が不足していると言わざるを得ない。受入れ側である本学の体制については、大いに改善を要する。

3. 日本の大学等における短期教育プログラムの特徴

3.1 日本学生支援機構による支援制度

従来、日本への短期留学プログラムと言えば、交換留学を前提とし、学期もしくは1年を基準とするもので、いわゆる「留学ビザ」が必要なものが多かった。しかし、日本語学習者の増加やニーズの多様化に伴い、2011年にはJASSOによる留学生交流支援制度「ショートステイ³（日本への留学生受け入れ）」が始まった。このショートステイは、3カ月未満の受け入れを対象とし、「超短期プログラム」とも呼ばれている。受け入れる教育機関のプログラムがJASSOに認められれば、参加学生には1か月あたり8万円の奨学金が受給されるため、各大学で工夫を凝らした超短期プログラムが行われるようになった⁴。

本学のサマーキャンプは、1か月程度の期間で行われるので、超短期プログラムである。ここでは、他大学のいくつかの超短期プログラムを概観し、その特徴や目指すものについて述べる。

3.2 他大学の超短期プログラム例

本学のサマーキャンプの内容と最も近いプログラムとして、東京外国語大学のプログラムが挙げられる。宮城他（2016）によると、東京外国語大学で2015年に実施された日本語・日本文化研修のサマープログラム（3週間）とウインタープログラム（4週間）は、初級後半以上の学生を対象とした、日本語や日本文化について集中的に学ぶコースである。午前中に日本語学習があり、午後や週末には文化体験、近隣地域での調査や公共施設の見学が組まれている。ま

た、日本人学生らが企画した様々な交流活動もある。「午前中の日本語学習と、午後や週末の経験は相乗効果を生むようにシラバスを工夫してある」ことや、「プログラムの最後に行われる修了発表会に向けてプロジェクト活動を実施する」ことが大きな特色である。これらは本学のサマーキャンプでも行われている。「参加した学生が近い将来、日本の大学の中・長期留学にふみだそうと考えるような行動レベルまでの変化を期待している。つまり大学院への交換留学や一般留学につながる重要な窓口としての役割が期待されている」プログラムであることも、本学のサマーキャンプの目的と共通している。

また、北海道大学では、2012年に中上級レベルの学生を対象に、1週間の超短期プログラムを実施している。青木他（2012）によると、日本語授業に加えて、日本人学生との交流型授業が行われていることが大きな特色である。交流型授業は、日本人学生と留学生がグループになり、グループごとに課題を決め、調査、ポスター発表を行うという流れで進められている。青木他（2012）によると、この交流型授業への学生のニーズが非常に高かったという。

さらに、大阪大学では2015年に、上級レベルの学生を対象に、3週間でアカデミック・ジャパニーズの基礎を学ぶ超短期プログラムが行われている。村岡他（2016）によると、プログラムの目的は「大学での研究活動のあり方を意識化させ、かつ将来、研究者や企業等での実務で高度な日本語を用いて活躍できる人材となるための準備」であり、リーディング、ディスカッション、オーラルコミュニケーション、レポー

³ 2013年度からは「協定短期受入」、2015年度からは「協定受入（短期研修・研究型）」と名称を変えて現在まで続いている。2015年度の「協定受入（短期研修・研究型）」は、8日以上1年以内のプログラムが支援の対象になった。

⁴ 本サマーキャンプは2012年度にJASSOに採択され、参加者は奨学金を受給している。

ト作成、発表などが組み込まれている。

これらの例から分かることは、基本的に超短期プログラムの場合にはゼロ初級や初級前半レベルの学習者を想定しておらず、最低でも初級後半レベル以上の日本語能力を持つ学生の参加が前提となったプログラムになっているという点と、短期でも成果や達成感を感じさせやすい内容になっているという点である。

一方、最近では日本語学習を主目的としない超短期プログラムも多くなっている。平成28年度のJASSOの奨学金支援制度に採択されているプログラムのほとんどは、日本語学習以外を主な留学目的としており、研究室での専門研究・研修や国際会議への参加などが行われている。そもそも超短期プログラムは、短期・長期留学のきっかけづくりとしての役割が期待されているため、最近では特色のある専門的な内容が採択されやすい傾向にある。例えば、名古屋大学の「名古屋大学先端自動車工学サマープログラム」は、日本語講座の受講も義務づけられているが、自動車工学に関する全ての授業は英語で提供されている。

3.3 他の超短期留学プログラムとの比較から見たサマーキャンプ

本学のサマーキャンプは、専攻を問わず、他大学のプログラムでは受け入れていないと考えられる初級前半レベルの学生も受け入れているという大きな特色がある。参加学生の日本語レベルとそれに対するサポートは4章で改めて述べるが、本学のサマーキャンプでは、初級前半レベルの日本語力であっても、十分に日本人との簡単なコミュニケーションは可能なことを参加学生に実感させ、達成感を感じさせる内容となっている。また、農家民泊など地域の特色を生かした様々な取り組みも行っており、地域活性化にも寄与するユニークな超短期プログラムとして、さらに発展の余地があると考えられる。

しかし、サマーキャンプ修了者で本学に長期留学した者は、2010年度の修了者が2014年度に大学院に留学した1名のみであることから、長期留学のきっかけとしての役割は現状では弱いと言える。今後、長期留学につなげるためには、専門的な内容を扱うなどプログラム内容の見直しや、日本語教員以外の専門科目教員の協力などプログラム体制の拡大が必要だと言えよう。

4. 日本語授業について

4.1 日本語授業の目的と目標

一般的に、日本国外では日本語コミュニティーなど人的リソースを含む日本語使用のための環境に限られる。それも一因となり、日本国外の日本語教育においては、教室外で日本語を実際に使ってみること、教室内にビジュアルセッションなどの「実際使用場面」を組み入れることは困難で、教室でのインプット中心の学習となりがちである。このような状況を考慮し、サマーキャンプでの日本語授業の目的を日本語力の向上と日本理解の促進、さらに、サマーキャンプの間に知りたいことを自分で決め、調べ、発表するという自律的学習態度の涵養とした。

これらの目的のもと、日本文化・社会・交流体験が豊富に含まれる本学サマーキャンプの特徴を生かし、日本語授業における目標を①学習してきた日本語を使う（日本語使用機会の増大）、②体験や活動を通して日本（日本文化、日本の経済、日本社会など）を知る（日本理解）とした。

4.2 参加学生の日本語力

授業や教室外の日本語使用のための活動内容を決める上で重要なことの1つは、学習者のコース開始時の日本語力を把握することである。初年度はタイ側から参加学生のレベルは上級だと言われていたが、サマーキャンプが始まってみると、平仮名・カタカナの読み書きもままならない学生がいること、また、全体的に

上級レベルには達していないことがわかり、ほぼ全員が初級レベルであると思われた。2012年度は全員が初級だと通知されてきたが、泰日工業大学における日本語学習時間は学年、専攻により異なるため、同じ初級でもレベル差が見られた。2013年度の事前通知では、全員が日本語能力試験のN5とN4レベル（ともに初級）保持者だったが、インターネットを利用した日本語能力自動判定テストJ-CATをサマーキャンプ開始時に受けさせたところ、初級前半（0～150点）と判定された学生が20人中9人、初級後半（151～200点）が7人、中級前半（201～250点）が3人、中級後半（251～300点）が1人と、初級から中級までを広く含むことがわかった。

このように、参加学生に日本語のレベル差が見られるものの、サマーキャンプの日本語授業は講師数などの事情から1クラスで運営している。2年度目以降は学年、学部その他、日本語能力試験の保持レベルなどの情報を泰日側に事前に求め、例年、初級～初中級程度の内容を準備している。

4.3 日本語授業の内容

ここでは、表2中のトピック・場面シラバスに基づく表現練習、日本についてのミニ講義、グループインタビューの3つについて述べる。

4.3.1 トピック・場面シラバスに基づく表現練習

例年、農家民泊がサマーキャンプの中頃に行われることから、サマーキャンプ前半の日本語授業は、農家民泊でのインターアクションを想定した内容が中心となる。初年度から2014年度までは、日本人の家で食事する・泊まるという場面で想定される表現（例「何か食べられないものがありますか」「～が食べられないんですが…」）や、通常の教室活動では使用しない「お休みなさい」、「お世話になります」などの挨拶

表現、社会文化知識（例 食事時のマナー、家屋内での靴やスリッパの着脱）と、文法練習（例 シャワーを使います→すみません、シャワーの使い方がわからないんですが…。）などを扱っていた。参加学生の多くの日本語力が初級程度と低いことから、日本人家族とのコミュニケーションは情報のやり取りが主なものになると考えたからである。

しかし、2015年度の農家民泊の観察（田中・佐藤2015）から、参加学生は日本人と情報のやり取り以外のインターアクションを行っていること、特に、農作業体験前後の家屋内や夕食時にインターアクションの機会が多いことがわかった。外国人との接触場面では、母語話者であるホスト側が相手の身近な話題を提供したり、話題の発展をコントロールしたりして、会話維持に努めることが多い（ファン1998）。市嶋（2014）は、農業体験活動で留学生と接した日本人の農業従事者の調整行動を分析し、「今、ここ」に当たる話題を優先して取り上げる、抽象的な話題が会話の維持を難しくすると判断した場合は身近なトピックを選択するなどの行動を報告している。つまり、日本語力が低くても日本人とのインターアクションは成立することから、民泊前の日本語授業においても、情報のやり取りにとどまらず、身近な話題でのコミュニケーションを想定して準備する必要があるとわかった。

そこで、2016年度のサマーキャンプ前半の日本語授業は、自分と身近な人・ものに関するトピックシラバス（自己紹介、趣味、好きなもの、将来の希望、食べ物）を用い、『まるごと 日本のことばと文化』（国際交流基金）のA1、A2レベルから適宜抜粋して教材とした。また、民泊の家の中を想定した場面シラバスを併用し、2015年度の観察を生かして基本的・日常的な語彙（例：ふきん、洗面所）や表現（例：お手伝いしましょうか、～は足りていますか）の練習のために自作教材を使用した。宿題は、語

彙や表現の導入・定着を目的としてディクテーションを出した。教材は『まると』の他、ホームステイ場面を扱った日本語ビデオ教材「石川で学ぶ」（石川県国際交流協会）のウェブ上のサンプル動画などを用いた。

2016年度の農家民泊時のインターアクションを筆者らが観察したところ、自分と身近な人・ものに関するトピックシラバスと場面シラバスの併用はある程度機能していた。今後も民泊時のインターアクションの観察を続け、参加学生がより話しやすいトピックや必要な場면을教材化していく必要があるだろう。

なお、書く力を伸ばすためには、初年度から「その日、一番…だったこと／その日、印象に残ったこと」について、4行程度の「青森の記録」を毎日日本語で書くことを課し、翌日提出させている。これは、見聞きしたことや考えたことについて振り返る手段の一つとなることを狙っている。教師による訂正はするが修正・再提出は求めず、コメントをつけて学生に返却している。

4.3.2 日本についてのミニ講義

サマーキャンプにおける日本語授業の目的の1つは、多くの文化・社会・交流体験や活動を通して日本への理解を深めることである。しかし、理解を促進させるものが自己の体験だけでは、偶然性が高く視野は広がらない。Kolb (1984) は、体験学習とは具体的な経験、内省的な観察、抽象的な概念化、積極的な実験を繰り返して学ぶものだとして述べている。体験を補ったり、体験を振り返る際の手助けとしての知識を与えたりすることが理解を促進させることにつながると考え、2016年度は新たな取り組みとして、日本（青森）の経済、生活、日本人の職業意識について、各30分の講義を設けた。3つの講義にはいずれも、引率のタイ人教師による通訳があった。

1つ目は、本学経営法学部教授による「日本

（青森）の（りんごの流通を通して見た）経済」をテーマとした講義である。これは、後日民泊で訪れるりんご農家やりんごセンターで見聞きすることの理解の深化を狙ったものである。また、経営系科目群を持つ本学に留学したことを意識づける狙いもあった。2つ目は、前年度タイに短期留学し、ホームステイを体験した4年生の日本人学生による「タイの家で見た面白いもの」というテーマの講義である。外国人の目から見て面白いと思ったものと、それを異文化理解面でどう解釈したかなどを話してもらい、後日の民泊で日本の家や日本人の生活に興味を持ってもらうことを目的とした。3つ目は、日本語の講師による「日本人の職業意識」についての講義である。これは、「働くこと」「就職」という面から同年代の日本の大学生の考えに興味を持ってもらうと同時に、卒業後、日本語を使って日本人と働く可能性がある泰日工業大学の学生に自身の将来について考えるきっかけを与えることを狙った。

いずれの講義も、講義後に理解確認をし、後に行う社会・交流体験の準備（日本人の家で観察したいものや日本人学生に聞いてみたいことについてグループ・個人で考えさせるなど）を行った。

2016年度の成果発表では、2グループのうち1グループがりんごをテーマに発表を行った。りんごの種類、タイでのりんごの流通やりんごの加工品について扱っており、ミニ講義の1つ目のテーマ（「日本（青森）の（りんごの流通を通して見た）経済」）や、その後見学したりりんごセンターでの学びが活かされた可能性がある。ミニ講義は2016年度からの新しい試みであるが、参加学生の日本語力に合わせた資料の準備、講義中の理解を助ける引率教師との事前打ち合わせ、ミニ講義の内容とその後の社会体験との関連づけの強化などに改善の余地がある。準備を重ね、来年度以降の継続を目指したい。

4.3.3 グループインタビュー

本学サマーキャンプは、様々な日本文化・社会・交流体験が組み込まれているが、それらに参加しただけでは日本語は上達しない。ファン他（2007）はインターアクション重視の日本語プログラムの運営者は、学習者が将来のいつか日本語を使用することを期待するのではなく、教室内外での日本語の実際使用を積極的に促すことに力を入れる必要があると述べている。本学サマーキャンプでは、プログラムで予定された体験・交流活動を日本人にインタビューする実際使用の場とし、実施前後の授業で準備や結果のまとめを行っている。

インタビュー活動は、日本語授業の目的・目標に沿って行われている。まず、インタビューの前に「サマーキャンプの間に知りたいことを自分で決め、調べ」るために、インタビューのテーマを考えるタスクを課している。初年度から2015年度までは、インタビューのテーマとともに、サマーキャンプ中の目標と終盤に行う成果発表のテーマとを日本語授業の初日に考えさせていたが、内容の深化や具体化のために教師によるアドバイスが必要な学生も多かった。そのため、来日前に時間をかけて考え、必要ならば教師の指導も仰ぎながら準備させた方がよいだろうと考え、2016年度からは来日前に「準備シート」⁵を渡し、日本（人の生活）や青森について、また日本の大学生について、自分の持つイメージを確認した上で、来日後のサマーキャンプで明らかにしたいことを考えておいてもらうこととした。この準備の段階を踏んでから、サマーキャンプでの体験や活動の過程で日本語でインターアクションをし（「学習してきた日本語を使う」）、「日本（日本文化、日本の経済、日本社会など）を知る」ことにつなげるのが狙いである。

4.2で述べた通り、参加学生の日本語力にはばらつきがあり、タスクを課してもそのタスクの遂行が困難な学生も出ることが初年度にわ

かった。そのため、2012年度からは泰日工業大学側に事前に日本語力が勝る学生をリーダーとするグループを作っておいてもらうようにし、授業でグループワークを多用することとした。インタビューやその結果の発表も一人では難しい学生もいるので、グループで行わせている。

2016年度のインタビューは2回行った。1回目は社会体験先（三内丸山遺跡／浅虫水族館／AOMORI 春フェスタのいずれか）で日本人の観光客に対して、2回目はミニ講義「日本人の職業意識」を聞いた後で本学の日本人学生に対してである。いずれも、インタビュー前後に質問時の表現やインタビュー後の発表の仕方などを全体で練習した後、グループに分かれて発言内容を考えさせた。教師は各グループを回り、必要に応じて表現に修正を加えたり、内容にコメントするなどした。

5. 参加学生による評価

前章で見た日本語授業の内容は、参加学生にどう評価されたのか。また、日本語力に差があるクラスを対象とした授業の難易度、教師の教え方、日本語力の差に対処し、授業内では扱えない書く力を養い、振り返りのきっかけとなることを狙った宿題の量や内容はどう評価されたのだろうか。2012年度以降、毎年最終日にアンケートを取り、授業の改善に役立てている。2012年度はJASSO 奨学金受給に伴い異なる形式で評価を行ったため、ここでは除外するが、2013年度から毎回尋ねている項目は、授業の難易度、宿題量、授業の内容、宿題内容、教師の教え方である。表3にこれらの項目についての2013～2016年度の評価結果を示す（2014年度の参加者は20名だがアンケートに回答した19名分を集計した）。

⁵ 準備シートについては6.3で詳述する。

表3-1 授業の難易度について

	難し すぎた	難し かった	丁度よ かった	簡単 だった
'13 (20人)	0	0	14	5
'14 (19人)	0	2	13	3
'15 (20人)	1	0	15	4
'16 (7人)	1	3	3	0

表3-2 宿題の量について

	多 すぎた	多 かった	丁度よ かった	少な かった	少な すぎた
'13 (20人)	1	1	16	2	0
'14 (19人)	2	6	10	1	0
'15 (20人)	1	3	15	1	0
'16 (7人)	1	5	1	0	0

表3-3 授業の内容について

	とても よかった	よかつ た	あまりよく なかった	全くよく なかった
'13 (20人)	3	17	0	0
'14 (19人)	5	14	0	0
'15 (20人)	4	15	1	0
'16 (7人)	1	6	0	0

表3-4 宿題の内容について

	とても適 切だった	適切 だった	あまり適切 でなかった	全く適切で なかった
'13 (20人)	9	11	0	0
'14 (19人)	10	9	0	0
'15 (20人)	1	19	0	0
'16 (7人)	1	6	0	0

表3-5 教師の教え方について

	とても よかった	よかつ た	あまりよく なかった	全くよく なかった
'13 (20人)	12	8	0	0
'14 (19人)	16	2	1	0
'15 (20人)	7	12	1	0
'16 (7人)	0	7	0	0

授業の難易度（表3-1）については、毎年度ほぼ同様になるよう準備しており、丁度よいという評価が多いものの、それ以外の評価もあり、参加学生の日本語能力のばらつきが反映されている。授業内容（表3-3）、宿題の内容（表3-4）、教師の教え方（表3-5）については概ねよい評価を得ているが、宿題量（表3-2）が多いと感じた学生が多かった。これは、参加学生と教師間でサマーキャンプのとらえ方や臨み方に

ギャップがある可能性を示している。

また、日本語授業は4.1で述べた目標を達成できたのか。2016年度アンケートでは日本語・日本への興味について尋ねた。ここでは、その結果（表4）とそれに関連したコメントの一部を取り上げる。コメント記述欄にタイ語で書かれたものは泰日工業大学のタイ人引率教師、あるいは本学のタイ人留学生により日本語に翻訳された。

表4 2016年度サマーキャンプアンケート（日本語・日本への興味について）

日本語・日本への興味について どれぐらいがんばったか ※1名未回答により6名分の集計				
日本語を話す	とても積極的に1	積極的に5	あまり積極的ではなかった0	全く積極的ではなかった0
日本語の勉強	とても積極的に0	積極的に6	あまり積極的ではなかった0	全く積極的ではなかった0
日本を知る	とても積極的に1	積極的に5	あまり積極的ではなかった0	全く積極的ではなかった0
サマーキャンプ参加前後で日本語力は変わったか	はい 6		いいえ 0	

2016年度の参加学生（1名未回答により6名分の集計）は、日本語使用や日本理解について積極的に行ったと評価しており、記述コメントには「機会があったら日本の学生や先生など日本人と話してみた」「日本人の学生に家族の役割やアルバイトのことを聞いてみた」などがあつた。サマーキャンプ後の自分の日本語力については、「もっと日本語を話せるようになってきた」といった情意面と、「以前は勉強したことをあまり復習せずに忘れてしまっていたが、サマーキャンプ中は復習したので自分のスキルが高まった」など実際の行動面で変化を認識していることがわかつた。さらに、サマーキャンプ全体については、「約束の時間より5分早く来ることや授業中のマナーなど、日本で得た経験を今後生かしたい」「将来、日系企業で働きたいので、今回の経験を生かしたい」など、帰国後の日本語でのインターアクションを見据えたコメントもあつた。

これら評価から、これまでの日本語授業の方向性は今後も踏襲してもよいが、宿題については頻度などに考慮が必要だと思われる。また、2016年度のサマーキャンプは日本語授業の目標である日本語使用や日本理解が達成され、サマーキャンプ参加により日本語学習への意欲や態度に変化をもたらしたと考えられる。

6. 日本語授業の考察と改善

サマーキャンプを行うに当たり、本学の新学期と重なる開催時期とそれに付随し困難を伴う講師確保、また、2016年度のような参加学生数の急減など、現場レベルではコントロールできない問題も多い。一方、担当講師が対応できることについては、改善のための努力をしている。ネウストプニー（1995）は言語管理理論で言語問題を「訂正課程」と見なしている。そのプロセスは、規範からの逸脱、逸脱への留意、逸脱の評価、評価された逸脱への調整計画、調整計画の実行と進む。本章では、日本語授業の運

上で生じた問題を言語管理理論を用いて位置づけ、問題＝逸脱がどのように改善＝訂正されていったか述べる。

サマーキャンプの日本語授業には複数の教師が関わるが、チームティーチングより1つの授業を1人で担当することが多い。担当講師は、引き継ぎノートや口頭・メールでのやりとりで、シラバスの実行度合いや参加学生の様子について意見交換している。そこに表れた教師から見た重大な逸脱は、①参加学生のレベル差、②日本の大学生との接触機会の少なさ、③参加学生の日本語学習や日本理解への意欲の低さ、④泰日工業大学側との連携の不十分さである。

6.1 参加学生の日本語力の差

4.2で述べた通り、参加学生には、初級前半から中級前半までと日本語力に差がある。授業での理解度、パフォーマンス、発話量の差となって表れるため、教師に日本語力の差が留意され、自身の教育計画が効果的に実行されていないのではないか、参加学生それぞれがストレスを抱えているのではないかと否定的に評価されている。このレベル差へは、4.3.3で述べたようにグループリーダーの事前決定という調整計画をもって対応している他、2016年度は翌日の授業で扱う内容を宿題として出し、授業までに最小限の語彙や表現の理解度をそろえるという調整を行った。

グループリーダーの事前決定に対しては、グループワークや情報の伝達がしやすくなったことから教師側には好意的に受け入れられている。一方、前章で見たように参加学生の授業の難易度に対する評価は例年分散しており、また、2016年度は宿題量が多いという評価が多かつた。参加学生の日本語力の差という逸脱に対しては、宿題以外の調整計画を立てる必要があるだろう。

6.2 日本の大学生との接触機会の少なさ

本学サマーキャンプは、日本文化・社会・交流体験が豊富に用意されているが、2013年度の担当講師には本学の学生とコミュニケーションを図る機会が不十分であると指摘を受けた。また、2013年度の参加学生からも、学外の様々な活動で会う、いわば大人の日本人だけでなく、同年代の人ともっと話したいというコメントが最終アンケートで見られた。これは、日本語授業について否定的に評価された逸脱である。日本で学ぶ同年代の学生との接触は、参加学生の帰国後の日本語学習や日本理解のさらなる動機づけになる可能性があり、サマーキャンプを行う大きな意義でもある。そこで、2014年度からは、サークル見学の設定、FSA 新入生歓迎会で本学在學生に質問させる（ことをきっかけに話をする）、留学生チューターを日本語授業に呼んでインタビューや会話の相手になってもらう、留学生チューターと留学生の交流の場となっている「ウェルカムデスク」の活動への参加、本学留学生対象の正規日本語クラスの見学・参加などの調整計画が実行された。

この結果、5で挙げたコメント（2016年度）の他、「日本人と話す勇気を得た」（2014年度アンケートコメント）、「日本人の友達ができた」（2015年度アンケートコメント）などの声が上がるようになった。参加学生が同年代の人と日本語を話す機会の少なさ改善されていると言える。

6.3 参加学生の日本語学習や日本理解への意欲の低さ

例年、サマーキャンプについて参加学生からは「日程が短すぎる」、「参加できてよかった」など、よい感想を得ている。また、5章で見たように、参加学生は日本語使用や日本理解について積極的に行ったと意識している。一方、教師側はサマーキャンプ中の参加学生は意欲が低いと見ている。

泰日工業大学の引率教師によれば、泰日工業大学では本学サマーキャンプへの参加募集の前にガイダンスが行われ、前年度の内容等について説明される。また、サマーキャンプの日本語授業初日にはシラバスが渡され、目標とサマーキャンプ中のタスクが明示される。つまり、様々な場面で日本語の発話が求められるプログラムだということは知らされており、それに臨む意志を持った学生が参加するはずである。タスク達成のための情報は事前に与えられ、サマーキャンプ中にその準備もできる。それにも関わらず、サマーキャンプ中に講師により留意された最大の逸脱は、既習で言えるはずの語彙・表現を発話しようとし、インタビューの質問事項を考案することができない、成果発表のテーマがこれまでの学習を踏まえたものになっていないなどであった。これらの逸脱は、サマーキャンプに臨む意欲が低い、授業での段階的な準備が最終課題に反映されていないと否定的に評価された。逸脱の理由は、目標及びインタビュー、最終発表といったタスクへの参加学生の認識が低いためではないかと考えた。

そこで、2016年度は「準備シート」（表5）を渡し、サマーキャンプの目的とタスクを明示する他、自分なりの目標を立て、自分の持つ日本に関するイメージを喚起させてサマーキャンプ開始後も振り返らせたり、インタビューや発表テーマとしてどんな観点があるのかを日本に来る前から考えさせたりすることで、主体的に参加するための意識づけをするという事前調整を試みた。シートは本学留学生によりタイ語に翻訳され、泰日工業大学のガイダンスにも間に合うように引率予定の教師に2月中に送付し、本学サマーキャンプに応募した、あるいは参加が決まった学生にシートに記述させることと、必要ならば手助けをすることを依頼した。自分の目標の達成度、来日前のイメージの検証、それらのギャップの考察など、振り返りに活用するため、準備シートはサマーキャンプに持参させた。

表5 泰日工業大学サマーキャンプ2016の準備シートの項目と内容

項目	内容
1. 日本語について	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を使用するという目的を明示 ・自分なりの学習目標の記述
2. 日本への興味	<ul style="list-style-type: none"> ・日本理解という目的を明示 ・日本の大学（生）のイメージの記述と、自分なりの行動（聞く、する）目標の記述 ・日本（人の生活）・青森のイメージと、自分なりの行動（聞く、する）目標の記述
3. 農家に泊まること	<ul style="list-style-type: none"> ・農家民泊を通して日本（社会／文化／人々の生活／考え方…）を知るという目的を明示 ・日本の農家や農家の生活についてのイメージの記述 ・農家民泊で知りたいこと、農家民泊への不安
4. サマーキャンプ後について	<ul style="list-style-type: none"> ・サマーキャンプで得た経験の活用への考えの記述
5. 発表テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・サマーキャンプでのインタビューや体験、考察を踏まえて成果発表会で発表してもらうことについて明示 ・テーマと調べ方を考えておくこと ・来日前に調べておいてほしいテーマの参考となるトピックの例示

準備シートの書き込みを見ると、7人中6人がサマーキャンプでの学習目標に日本文化の理解を挙げ、日本語の使用について言及したのは1人だけだった。日本語使用の意欲喚起のためには、サマーキャンプでのコミュニケーション目標を「～できる」という形で示した can-do リストを例示したり自分で作成させるなど、日本語使用をより具体的にイメージさせる必要があるだろう。また、日本への興味について、日本の教育システムや日本人の環境意識などに言及したものがあつたが、インタビューのトピックには挙がらなかった。教師側も準備シートを活用して参加学生が興味を持っている事柄を把握し、インタビューなど発話に表せるよう、促しや手助けが必要だろう。

6.4 泰日工業大学側との連携

6.3で述べた準備シートの提供・実施という

調整に対し、事前の書き込みが不十分であるという逸脱がサマーキャンプ開始後、留意された。この逸脱は、書き込んでいない学生への否定的評価ではなく、準備シートの目的や意義を送付時に説明されていたにも関わらず、確実な書き込みを指導できなかった引率教師への否定的評価へつながった。

準備シートの書き込みは、単にサマーキャンプ中の参加学生のパフォーマンスを向上させるためのものではない。ネウストブニー（1995）は言語管理理論を応用し、学習過程を1つのプロセスと考えているが、サマーキャンプでの学びもプロセスとして考えれば、準備シートへの書き込みはプロセスの初めの意欲喚起の段階に当たり、既に学びは始まっていると考えられる。しかし、2016年度はその学びのプロセスを共に支えるという連携が、泰日工業大学側とうまく取れなかったと言える。

また、5章で見たように、サマーキャンプ参加は日本語学習への意欲や態度に変化をもたらしていると言えるが、それらが継続していくような事後指導までがサマーキャンプの学びとして考えられる。サマーキャンプを1つのプロセスと考えれば、サマーキャンプ中だけでなくその前後も重視されるべきであり、それには泰日工業大学側のより深い理解と協力を求めていく調整が必要であろう。

7. おわりに

本学のサマーキャンプは、2010年の開始以来、多くの文化・社会・交流体験や活動を通して日本語を実際に使用し、日本や青森への理解を深め、帰国後のさらなる日本語学習・日本理解につなげること、また、本学の認知度を高め長期留学へのきっかけとなることをプログラムの大きな目的としてきた。グループ活動を取り入れることなどにより、初級の学生であっても参加可能なプログラムになっている。日本語使用機会の増大と体験や活動を通しての日本理解という目標のもとに日本語授業が行われ、内容の改善や新たな試みがなされている。参加学生の評価・コメントから、日本語授業の目標は達成され、サマーキャンプの目的である日本語学習のさらなる動機づけとなっている可能性は高いと考えられる。

しかしながら、本学サマーキャンプを経て実際に長期留学に至った参加者は少ない。本学のサマーキャンプのような超短期プログラムは、参加学生が近い将来、中・長期留学に踏み出そうと考えるような行動レベルまでの変化を目指すものである。参加学生が長期留学をも視野に入れられるようになるためには、サマーキャンプを自らの日本語学習の中でどう位置づけるか、サマーキャンプ終了後にどのように生かしていくかなど、サマーキャンプの意義を学生によく認識してもらう必要がある。また、教師側からプログラムを評価すると、参加学生のレベ

ル差、日本の大学生との接触機会の少なさ、参加学生の日本語学習や日本理解への意欲の低さ、泰日工業大学側との連携の不十分さという点が問題と認識され、それらへの対処を通して授業の改善が行われている。

大きな課題として残っているのは、日本語教育の面で送り出し機関である泰日工業大学側との連携の不十分さである。今後、より意義のあるプログラムにするためには、サマーキャンプ前後の指導の充実をも図るために連携を深めることが必要である。連携の重要性を認識してもらうためには、互いの大学、及び、参加学生にとってのサマーキャンプの意義の再確認、日本語授業の指導目標、学生の学習成果に関する十分な議論とそれを踏まえての次年度の実践、引率教師に求める役割、及び、本学側の日本語教師に泰日側が求める指導内容の明確化などを共通課題とすることで、泰日工業大学側のより積極的な関与を得たい。

サマーキャンプは課題とともに発展の余地、また、他プログラム開発の基礎とできる部分も大きい。他プログラム開発の際、まず必要なのは、スタッフの拡充である。サマーキャンプでは既存の人員を活用しているが、2.4で述べたように人員が不足している。サマーキャンプではしばしば、海外・地方都市滞在、集団生活、外国語のストレスなどから心身の不調を訴える参加学生がいるが、対処する余裕はほぼない。次に、プログラムの設計を開かれたものとするのである。サマーキャンプのように送り出し機関が決まっていれば、プログラムの目的といった基礎的なことから共に構築すべきである。その上であれば、上述のような連携を図ることもより容易になるだろう。3.3や4.3.2で見たように、日本語教員以外の関与を求め、プログラム内容に厚みを持たせることも重要である。

短期留学は、日本語力や日本文化理解を期間内に急速に向上させることは難しいが、参加学生のその後の日本語学習において反芻され、継

続の契機ともなるものであろう。今後は、参加学生が帰国後、サマーキャンプ参加をどのように生かしているかを調査し、さらなる動機づけにつながるプログラムとなるよう、改善に役立てたい。

謝辞

2016年度の泰日工業大学日本語サマープログラムの日本語授業において、「日本（青森）の（りんごの流通を通して見た）経済」をテーマに、本学経営法学部の高山貢教授にご講義いただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 青木麻衣子・小河原義朗・鄭惠先（2012）「2012年度韓国協定校超短期留学生受け入れプログラム開発・実地報告」『北海道大学留学生センター紀要』第16号、118-133
- (2) 石川県国際交流協会 石川県日本語・日本文化研修センターウェブサイト「日本語ビデオ教材『石川で学ぶ』」 < <http://www.ifie.or.jp/ijsc/j-video/video.html> >（2016年12月15日）
- (3) 市嶋典子（2014）「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察－農業体験活動における調整行動に注目して－」『秋田大学国際交流センター紀要』3号、1-13
- (4) 韓立友・佐々木幸喜・河合淳子（2015）「『質の保証』を目指す短期学生受け入れプログラムのために－先行事例の検討に基づいて－」『論叢』第5号、京都大学国際交流センター、17-34
- (5) 国際交流基金（編）（2013）『まるごと 日本のことばと文化 りかい・かつどう A1』三修社
- (6) 国際交流基金編著（2014）『まるごと 日本のことばと文化 りかい・かつどう A2』三修社
- (7) 近藤佐知彦（2012）「SS プログラム J-ShIP の一年目：新コンセプト超短期日本語プログラムへの挑戦」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』第16号、97-106
- (8) サウクエン・ファン（1998）「接触場面と言語管理」国立国語研究所特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」会議要録
- (9) サウクエン・ファン編著（2009）『インターアクションのための日本語教育：実践日本語におけるシラバスデザインの理論と実際』神田外語大学共同研究プロジェクト研究成果報告書、神田外語大学
- (10) 泰日工業大学ウェブサイト「大学概要」 < <http://www.tni.ac.th/web/tni2014-jp/index.php?option=contents&category=21&id=40> >（2016年7月8日）
- (11) 田中真寿美・佐藤香織（2015）「農家民泊での異文化コミュニケーションにおける語学サポーターの役割」『日本語教育学会第8回東北地区研究集会予稿集』、44-49
- (12) 名古屋大学ウェブサイト「名古屋大学先端自動車工学サマープログラム」 < <http://www.engg.nagoya-u.ac.jp/en/nusip/index-j.html> >（2016年8月22日）
- (13) 日本学生支援機構ウェブサイト「平成26年度短期教育プログラムによる外国人学生受け入れ状況調査結果」 < http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_p/_icsFiles/afieldfile/2016/03/24/program14.pdf >（2016年11月24日）
- (14) 日本学生支援機構ウェブサイト「平成28年度海外留学支援制度（協定受入）採択プログラム一覧（短期研修・研究型）」 < http://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoshu/study_j/short_term/_icsFiles/afieldfile/2016/01/27/h28tanki_u_kennshuu_program.pdf >（2016年8月22日）

- (15) ネウストプニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- (16) 宮城徹・寅丸真澄・金子比呂子 (2016) 「JLC-TUFS SS プログラムの進展—2015年サマープログラムを中心として—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 42、227-241
- (17) 村岡貴子・磯野英治・花井理香・大平幸・上仲淳・村上康代・金孝卿 (2016) 「2014年度超短期プログラム「アカデミック・ジャパニーズの基礎」の実践報告」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』 第20号、81-93
- (18) Kolb, D. (1984) *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliff: Prentice Hall.

※本研究は、JSPS 科研費（No.25280121）の助成を受けた研究成果の一部である。

(青森中央学院大学 経営法学部 講師 たなか ますみ)
(北海道教育大学函館校国際地域学科 講師 さとう かおり)